

## 第59回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

生きる希望

熊本県 熊本市立出水中学校 二年生

岡本 一花

今でも鮮明に覚えていることが私にはある。小学五年生のとき、お母さんから

「入院しないといけない。」  
と言われたことだ。

胸腺腫という病気だった。そのときに、一瞬頭が真っ白になり、すぐに不安が押し寄せてきた。お母さんは生きて帰ってこれるのだろうか、何カ月会えないのかな、家はどうかやうんだろう……色々なことを考えた。入院したらたくさんのお金がかかることも知っていたので、これからは色々我慢しなきゃとも思った。

入院生活が始まると、祖母が家のことを手伝ってくれるようになった。お父さんからお母さんの病状を聞き、安心したり不安になったりした。お母さんは、入院生活を繰り返しながら、克服のために抗ガン剤治療や手術を頑張っていた。そんな生活が続いた後、無事にお母さんは退院し、元の生活に戻ることができた。しかし、お母さんの入院生活の間、お金のことで私が我慢する場面がなかったことが不思議だった。

あれから約二年半、私はお母さんに病気だったときの心境と家計のことを聞くことにした。まず、病気が判明したときにどのようなことを思ったのか聞いた。最初は、やはり病気の心配をしたそう。お母さんがなった胸腺腫という病気は、かなりまれなもので治るのか不安だったと言った。次に、家族のことについて心配したと言った。元気にしているだろうか、学校では無事に過ごしているだろうかなど、色々な心配をしていたそう。

しかし、経済的なことについては、あまり心配をしなかったそう。どうしてか聞くと、生命保険に加入していたことが大きかったと言った。

お母さんは、ガンや脳卒中、急性心筋梗塞になったときに保険金の一部前払いされる保険に二十代の頃加入していた。その頃は

『この保険を使うときは私の人生終わりだ。』と思いながら加入し、知人からも「誰かが助けてくれるからそこまでの保険はいらないよ。」

と言われたそう。その頃のお母さんもまさか病気になるとは思っていなかったと、今のお母さんは言う。それから二十年以上が経ち、病気が判明したとき、『この保険に入っていてよかった。』と思ったそう。

## 第59回中学生作文コンクール

保険が適用された後、一部前払いの保険金の他に通院や入院、手術などに必要なお金をもらったので、電動ベッドやウイッグなどの必要なものを買えたと言う。また、お母さんは入院中、病気を治して家に帰ったら色々なことをしたいと思い、つらい治療も頑張れたそうだ。その「生きる希望」を持ったり、叶えたりするためにも、生命保険はとても大切なものであり、それがあったことで治療に専念することができたとお母さんは言った。

お母さんに当時のことについて聞いてみて、保険は「のこされた人のための保険」でもあるけれど「生きるための保険」でもあると思った。病気になるなということが一番だし、健康はお金では買えないけれど、何かあったときに自分や家族が安心して生活するためには、保険が大切だと思う。また、自分に合った保険を知ったり、保険について調べたりすることも、これからの人生で役に立つと思った。

今では、お母さんの病気はだいぶ回復し、家族で楽しく過ごすごうできている。これからも、こんな日常が続けば良いなと思う。